



歴世女装考

春

76  
972  
1

76  
972  
1



岩瀬百樹翁撰

# 歴世女粧考

三書房合梓發兌

## 歴世女粧考序

わが友山東尾のあまふむうゝ素仕侍従氏。

清人たるは比の書讀むを好む。今於八十歳

の甲子に於ては、昔の女粧を冊子としてし

世の中より、いふ唐女をたふとて、女を好くする源

くかうう編む。やあゝも、いふ名をたふする編み

をあるとて、いふ年を編む。結をいふつひ

あり、いふある日を、いふの抄を取出く。

伊  
972  
卷 1

女  
装  
考  
卷  
一

たゞ其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては

の記に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては  
其の道に於ては其の道に於ては其の道に於ては

以<sup>カミツ</sup>上代の素<sup>モリ</sup>撰<sup>セン</sup>うら<sup>ウ</sup>中<sup>ナカ</sup>傳<sup>デン</sup>  
 明<sup>アカ</sup>く<sup>ク</sup>今<sup>イマ</sup>此<sup>ココ</sup>瑞<sup>ミ</sup>嘉<sup>カ</sup>よ<sup>ヨ</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>来<sup>キ</sup>つ<sup>ツ</sup>  
 様<sup>サマ</sup>を<sup>ヲ</sup>と<sup>ト</sup>く<sup>ク</sup>た<sup>タ</sup>い<sup>イ</sup>お<sup>オ</sup>の<sup>ノ</sup>死<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>角<sup>カク</sup>を<sup>ヲ</sup>む<sup>ム</sup>す<sup>ス</sup>の<sup>ノ</sup>自<sup>ジ</sup>然<sup>ゼン</sup>  
 牙<sup>キバ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>編<sup>ヒ</sup>攪<sup>カク</sup>も<sup>モ</sup>来<sup>キ</sup>て<sup>テ</sup>む<sup>ム</sup>す<sup>ス</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>編<sup>ヒ</sup>留<sup>リウ</sup>する<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>  
 と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>魚<sup>イサ</sup>を<sup>ヲ</sup>造<sup>ゾウ</sup>る<sup>ル</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>に<sup>ニ</sup>板<sup>イタ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>我<sup>ワ</sup>家<sup>カ</sup>に<sup>ニ</sup>  
 流<sup>リウ</sup>す<sup>ス</sup>魚<sup>イサ</sup>母<sup>ハハ</sup>の<sup>ノ</sup>人<sup>ヒト</sup>を<sup>ヲ</sup>見<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>お<sup>オ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>山<sup>ヤマ</sup>東<sup>トウ</sup>尾<sup>ビ</sup>  
 か<sup>カ</sup>き<sup>キ</sup>て<sup>テ</sup>も<sup>モ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>魚<sup>イサ</sup>其<sup>ソノ</sup>よ<sup>ヨ</sup>り<sup>リ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>と<sup>ト</sup>  
 め<sup>メ</sup>傳<sup>デン</sup>する<sup>ル</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>共<sup>トモ</sup>に<sup>ニ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>

魚<sup>イサ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>来<sup>キ</sup>て<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>魚<sup>イサ</sup>は<sup>ハ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>  
 お<sup>オ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>  
 魚<sup>イサ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>の<sup>ノ</sup>い<sup>イ</sup>れ<sup>レ</sup>を<sup>ヲ</sup>あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>て<sup>テ</sup>

弘化四年丁未三月 菅原結々

歴世女装考附言

今弘化四年丁未より廿九年前文政二年己卯の春友人北川真顔翁  
より彩色の古画ある女の圖の掛軸をりせむる書翰ふ此繪は續を  
たのまきほほど遊女あるや常多みの女ありや見ざるんがうて筆を下  
がし説をまうせよといひむをせりはうし其繪をとりてふ今ふ比が髪  
此結る衣服をも甚異なり下州國を業むうふかぞあやけるるを目を  
新よあり其國の寛永間の湯女ありけむ其考証を記し國の模  
らるるかへぬさん圖はむくひくもゆゆ近古の比及まう女装の今と異る  
夏かの如く猶むうふ近ひ遊ばらうあうんとそのち古國ふ遇バウる  
らを臨し古俗を涉獵に其さぬの考証をまうしはるふ遂よ廿四五葉  
なるの著述め物ありぬさて一日年来ありた医師来りて謂るや

或御許の御女今年十三とて鉄將初志うねざらふ其の母御余よ  
ゆりせけり足下そとの京山ふありたとき女は鉄將つけりはるるや  
の事と又なふゆりゆの始まるるを京山よたづぬまよのちをるや  
いあやといひけりふ名をさしあひるは尋ゆあうちもあやを遠く  
和名抄をなめやう近くちかの室町殿間の物ふしと書抄てけり上  
けるふ是もまた著述め物ふどあける因てあひるは鞆粟以来海内蕩  
平の事二百有余年萬民逸樂して文運もまう日を過て盛られは焦  
篇雄作も陸統上梓て百逞備らざるあり然るふ獨り女装の沿革を  
高權て古の質樸を奉て時粧の侈靡を省棄させあひる容飾具其  
物其事の起原など古書は微て研究する者ふけむむのを漢字する  
が其書を綴る世教の萬一ゆもあうんりやとむひむうてまう女装

考といふ書名を儲けの文政五年にありける今より廿三年斯てのちの事は  
 閑ありふ書成操り付女装に係る変りまじり必撮抄り紙假の女装考  
 料抄と名付し物今既ふ廿五巻ありぬ半紙十一行然れども年々たるあり  
 草子の作を書肆等ふ乞を随て編まれバ随て需め督促て他の操筆は  
 いとまあるまき女装の料枝をを空しく積りたるふおの是今年  
 古稀のうへ九つを重算ぬまじりかくて骨も料枝と俱に朽るんとて  
 かのころありまじりしハ拋棄せられたる書を綴るふいふ事蓋おの企  
 始ハ七八百年許の中昔を限りとまのほど太古の女装も追遡りゆ  
 書名は歴世の二字を加ふ

○吾が寡陋の積置たる料材をまじり書と為しつて考証の引拠尚  
 ありとて俄にそのおのるを探索んとするふ寒家書はまじりとて

蔵も三度の類火過半にありぬい名蔵する書ハ学友に備ありひ  
 西土の書の稀ある物ハ轉借して返すべし期ふ迫る燈下披て鶏むね  
 ろうされざるもたびありぬ○さて頃日一婢を買ひし南總の漁者の  
 女とまじりて漁獵の事など尋問ふ詳も答をあるもあれ海濱に跡き  
 話ありたやと強てたぐひけまじり涙かたりていやう妾が祖母年  
 老るい魚漁にありざるうい魚籃を造るを手業とけり去年三月  
 節供の日自ら造たる籃を提て近隣の児曹と俱に潮干の貝を拾ひふ  
 出けるふ其所得ハ蓼螺・拳螺・沙嚙比目の類あり遠く進み歩み随て得  
 ゆる年老の怨ふまきまふ一ツも多く拾んとてや児曹よりおのりたるふ拾  
 て帰しし祖翁いへるまきまふ悪風俄に起り潮水立まじりふ至りしや  
 船をゆてちがふ船助んとまきまふ節供の遊びふ出て男一人も家ふ

をうむ遂ふぢまぬ魚の餌とありぬ慾をかゝるむらたは程ふ貝とむらひ  
て見輩とこのみ帰らばとて母も歎いぬと法然は語まうゆのきおれ  
まて按て拍て顧く吾があの著述も考証多うんを貪りて筆の命毛  
短たをひまういかの老夫が潮干の貝を拾ひよあつと發明して群籍の  
涉獵を茲ふやめ学の淺瀬ふ筆を濡しつさるる文の海ふらひのじ  
ぬる文具もあまふあべく或い澳の玉藻のゆらゆら磯ふようたる飛と  
其原をまらむをゆとてむらひもあやまらう○世もく此書の全  
部うるさく假字を下あひひ引る漢文の物の文多し假字をまら  
て読下の文ふあ少く指摘たるのさむかあつけあひひの事と解は元  
下み俗言を用ふるを總て書物と疎き女児倚中も読易く通曉せ  
まやうふとくれ所者あり陋作争う識者の現を俟ん○中古の女

装い當時の物語各どの甚多し實記の論多けきと竹取源氏らるぬ  
作り物語の確証ありあかたふ似れども世のとゆれ人其世の風俗を  
うけりたるものさる証拠とせ○書を讀て抄録せし時筆は用い  
ゆらひて巻次をかたかたせむもあまを引用臨て再本書ふ扱べられ  
ど其書もよ遠くは世のさるふゆもあり○近き世は女装忌諱ふ  
觸んとおの事棄てあるさるもあなり○抑や世は女装の書よこ  
ゆる事同くして諸書に散見し物異むと類証のあはれあり  
世をさるものさるさるかの考料抄あはれりあはれと書とあまらぬ  
引紙の多端はよむふらさく且紙葉の多を賦ひ省たる事いと多し  
○檢証の古圖もあまらうけりあはれがあはれ詮用の國のみをせり  
蓋し新圖を載らる兒女の眠を驅の○此書全部の骨髄和漢雅

俗の言辭を混淆て俗ふり人鶴文章あふひのき淺学あふゆあありあつのみ  
 ろくど杜撰の説管見の弁嗚呼大方の笑をいふいせん

弘化四年丁未二月廿五日

江戸 岩瀬百樹



○寛永中湯女繪縮圖

此圖の事ハ附言ハのり

真顔翁が問

答云

古画一覽

ひつひいさま

眼下ハ地女

あつ遊女あつその着別



▲絵やう極彩を帯ハのぐまも糸組こつんぬ  
 所語▲名護屋帯あり

▲女のかつこ女まこつんぬ古圖

わすこつんぬ此人物ハ地女あつ

▲地わさだりやうあゝ帯あわと朱一段つ

わうわがういども人物の風を考は時代ハ寛永中婦人ハ其比ハ湯女あふ一然わりのよりハ  
 垂髪ハし女ハ小袖の模様ハ丸の内ハ洲の篆字とあつきこつんぬハ湯女と髪あつひ女とも古

唱ハゆあかハあつ

訓沐の字と模様

あつハ是ハ髪



▲小袖ハこのぐ丸りやう朱あびあさだ  
 糸目合ハいハたび紫

▲地わさだハ揚金ト銀ハ葉朱

▲あび朱糸目ハ金ハいたび白

▲扇金地ハ布ね朱

比丸々ハのりやうあつ事ハ昏見多ゆあ其比及ハ髪洗ハ女ハかつりやうの物着たつんぬも  
 あつづづびのぐ湯女あつたあつづづ湯女ハ車ハ寛永十八年板ハ持てる物持ハ湯女といひてあ  
 めける女ども廿人並居ハ風呂ハ入りつる客のあつをかさ髪をそく其外ハ容色ハあつ心さ  
 わさつき女房ども湯ハ茶よと持茶ハなな色ハ世かたりとこつんぬハ枕席ハあつ盛ハあつ  
 事ハ明暦万治ハ比ハ物あつわさこつんぬハ依之絵ハもう依ハ事と存ハ

以上真顔ハ  
 こつんぬ



歴世女装考卷一目録・前編之部

- 一 鏡かみ始原イノマリ
- 二 方鏡たうまきやう四角しかく鏡かみををり
- 三 柄鏡へまきやう今いまはは如ごとくく柄へ ○ 神佛しんぶつみ鏡かみを奉納ほうなつする事
- 四 八やちつ花形はながたの鏡かみ ○ 鏡かみはは異名いごう
- 五 唐たうははかかみみととのの名義なごう ○ 鏡かみ鏡かみ
- 六 鶺鴒きまぐらはは鏡かみ ○ 鶴つるののかかみ
- 七 ちちりりはは鏡かみ磨とが
- 八 松山鏡しょうざんかみ
- 九 懷中鏡わいのちゆうかみ ○ 西土さいどはは懷中鏡わいのちゆうかみ

- 十 鏡かみを照てして面見めんけんををせ
  - 十一 鏡臺かみだいみ守まもりりを掛かけ ○ 椰やの葉は ○ 鴛鴦うんおう羽うの事
  - 十二 ちちりりはは鏡臺かみだい ○ 西土さいどの鏡かみ乃肇なりしり
- 櫛くしの部
- 十三 櫛くしの權輿ごんい ○ 擲櫛てきくしを忌い ○ 湯津津たうしん間櫛まぐし考
  - 十四 櫛くしみ扱あてて神代かみよの人ひとは躰量あわたまの考
  - 十五 黄楊わうやうはは櫛くし ○ 沈しん乃櫛なりくし ○ 玉櫛たまぐし
- 通計附録共二十七條

歴世女装考卷一

江戸 岩瀬百樹 編撰

一 鏡の始原

おろそ女中の燕脂鉛粉を顔に糝ふは敢て好色の為めむるむる是れ儀  
あり祝事ありさむばとせりあるありはへ女中の年若下も朝夕  
假糝一ふあると賤き市中の女も不幸あると素顔を禮儀と或は  
後家とありて厄ふるあるゆゑ貴賤もけさう成せる成定例とせ  
さむを假糝を祝事と素顔を不吉とせ是御国のみも唐国共  
古今の通儀ありさるる女ととるふゆはけせり思て是事ど  
くはのけさうするふ第一の必用ある鏡ありゆゑは鏡の女乃守り  
とて女の魂ともいふ俗言はありむ縁故ありやありは鏡との物と  
日本用瀬のとりめありあり物とてて神代卷上を按ふ國常立尊乃

御子ふ天鏡尊との御名あり鏡との物ありとて御名も号けりらめ

さて鏡といふ物のこゝに同書同卷に伊弉諾尊宙を御ぐは珠子と生ん

とて左り乃御手ふ白銅鏡を持ふ則化出神有是を杵灵尊と謂

右の御手ふ白銅鏡を持ふ則化出神有是と月弓尊と謂又廻首

顧眄之間則化神有是是を素戔嗚尊と謂也中つ天照大御神あり月

弓のみとて是鏡といふ物の国史みえん始ありけり又鏡を作るといふ

海神あり是鏡といふ物の須佐之男命勇猛

事の見えざる古事記に天照大御神也弟命の須佐之男命勇猛

みよとて幽ぐの悪態とくやみある御姫の大御神畏むて天石

やと屋戸を閉てさしこを坐れば世世常闇とありて万妖ありし由は八百

万神天安河原に集り思金神に令思事計大御神をゆててまのん

ためみ天宇受賣命に可笑技をさせん其御弊み用る種々の物を

造る中ふ古事記に曰科伊許理度賣命令作鏡とあり

古語拾遺に火次の度不

鑄る其状美而とあり

九

さて其時天香久山の賢樹を根と定め七かの石屋戸前小建て其中枝小  
かの命が作りたる御鏡を掛する事日本紀 御鏡の形御鏡の形状大さき古人の説わとど鄙華ふの甚思バ爰ふさるさば  
八咫御鏡の形御鏡の形状大さき古人の説わとど鄙華ふの甚思バ爰ふさるさば  
此神鏡を天照大御神御身を離去あがざる傳國の神宝とせさせ  
ひ古事記御天降段御孫の瓊杵尊八尺勾璽鏡及草那  
藝劍を授あひて為天下主ととあ人の詔命ふ古事記此之鏡者專  
為我前御魂而如拜吾前伊都岐奉下とあり此事日本紀ふ小異あり  
俗ふくをとのかみみりたなりひあればいさあれたのちあもいさあひいひい  
ものことあり天照御神の女神を御座ゆ陰象鏡を御魂とせさせ  
あひあふ此故實本拠て鏡を女の魂といひ守りともいふあり西土を  
古鏡ハ可辟邪魅禳火災ともするより五雜組卷十えんたり右のどく鏡ハ  
女のなまひあふ我が鏡さうとも裾あもかけざるや清浄よまきた物ぞし

清少納言今弘化四年丁未八月の御時の宮女あり  
枕の草子よ後げのてり調度

さるものめで女のかみまきりやうろのねもるるめとといへる八百年の  
むもたまへ鏡を磨がゆらふふ心かへて拭ひ硯ハ七々よのみ洗ふゆ  
とわのひ黒玉もあめをへるとさど清少納言がころをもあじあや○さて併  
の事どもを以て鏡ハ神代よりありしあめ女中の用具の中あて第一尊むべき  
物あるとある鏡ハ魔除の中あめあめ禁中あめ簾もも掛御船もも  
あひ一車榮花物語みえんら○西土の鏡の始原ハ堯の時をてて鏡を  
清少納言事物紀原えんらうけとを鏡の故事ハ和漢の昏あまき散  
見を抄録あがごとくあ事のよりあ成のみ取あつてくよかたのその  
○因云北白瑣譚前編尾張岡名古屋の入口前津といふ西の人よ白翁と  
いへる古鏡を藏する内ハ神代の鏡もあて蠟思摺る成五ッ六ッ見  
さう云とあり神代の鏡と鑑定さるよりあふれれど其形状もいへ

づ 図中のせざるハ遺感ありおのま書を作り古圖を載んとゆのみゆ名  
 古鏡を藏する人ともふいたりのありてをひてふ神代の物とおのみの  
 一枚も見む **集古十種** 古銅部ふ古鏡百八十八枚の圖あきども是ぞ  
 神代の物とおのみの一枚もえを稀ある物成伴の書ふかの箱の  
 所藏は神代の鏡五六枚ありといひ一いつある状ありけん見ま  
 りけきど洞中の珠なればせんまゝなり

(二) 方鏡 四角あり

鏡ハ月ふ象る物ゆ名圓を本形とまらるる **万葉集** 卷七  
 「眞寸鏡可照月乎」 同書 卷八 「銅鏡清月乎」と月ふよみかけされを圓は  
 交明一西土もまらるるを本形とま 博古圖・宝鏡冊始 ありれどもちた  
 方鏡あり用ひさありて造り一物とをわりの **西京雜記** 卷二 漢有方  
 鏡影倒見」といひ一機鏡あり **延喜式の内匠寮式** 今より千年なるの  
 鏡影倒見」といひ一機鏡あり

御式をわたり御鏡一面方七寸」とありて御鏡を清く・熟銅・炭・帛・布・油  
 鑄師・磨師の人数をも妻くありあり是の帝の御鏡あり方鏡も  
 古くあり一をあらざり

(三) 柄鏡

柄のはたはる鏡成唐土あり柄鏡といひくいと古くよりあり一物あり  
**淵鑑類函** 卷三百八十 鏡の部 李氏録を引て「舞鏡あり有柄漢武帝時舞人  
 所執鏡也」とあり **五雜俎** 卷十二 大中橋の民陳某脩宅垣中長  
 柄の小鏡を得たり云」とあり 以上漢文を和漢やも鏡ふ柄成作る事乃  
 考へ下ふハベ一〇さむむハ神佛ふ鏡成は養するとあり其いと古き  
**肥前風土記** 昔息長足姫尊 神功 松浦山ふ在て遙み国形と覽みハ  
 勅祈曰天神地祇為我助福乃用御鏡此処安置其鏡化為石山ふまを  
 名て曰鏡宮」とありかやうふ神ふ鏡を奉りて祈のありとまるハかの天岩戸

の御時おんとき小鏡こがたをはらりて奉りたる故實こじつ小鏡こがたありて  
今の神しん宗そうの御時おんときをはらりて奉りたる故實こじつ小鏡こがたありて  
の故實こじつ小鏡こがたありて  
その時そのとき賢けん木きを根ねととりてを引ひくも岩戸いわとの附根つけねととりて  
中昔なかつむかし 七八百しちやうひゃくの比ひ及およぶのりて  
佛法ぶつぽう盛さかるるる中昔なかつむかし 七八百しちやうひゃくの比ひ及およぶのりて  
佛ぶつ法ぽう盛さかるるる中昔なかつむかし 七八百しちやうひゃくの比ひ及およぶのりて

柄鏡へがたがたを新あらたふ清きよて奉納ほうなつする事ことととなり  
更科さらしな日記にちぎ  
原孝標はらたかすゑがむす

信濃国しんのうくにふも一時いちとき以前いぜん旅行りょぎんせし事ことどもをゆふおびえたり  
長谷寺ちやうそへ  
孝標たかすゑが女むすめの作者さくしや多おほかみ成なり奉納ほうなつする処ところの文ぶんふ「ち一尺いちせきの鏡かたをいさせに  
えりてまのうせぬ中なかつたてまのううかみ成なり奉納ほうなつする処ところの文ぶんふ「ち一尺いちせきの鏡かたをいさせに

たてまのううかみ成なり奉納ほうなつする処ところの文ぶんふ「ち一尺いちせきの鏡かたをいさせに  
たてまのううかみ成なり奉納ほうなつする処ところの文ぶんふ「ち一尺いちせきの鏡かたをいさせに

一ツひとつの話はなしあり事こと長ながれど好車こうぐるまの人の話はなし柄へがたととなり  
たてまのううかみ成なり奉納ほうなつする処ところの文ぶんふ「ち一尺いちせきの鏡かたをいさせに

○下野国しもねのくに都賀郡つがぐん鹿沼かぬまの村むら長ながふ山口やまぐち四郎しやうらう左ひだり工たくら門かど安良やすらとの人ひと篤実あつじつありて  
学がくを好このむ人ひと多おほ前年まへとし押原おしはら推移録たいしりくとの人ひと書成しやうじやう岡板おかくをその下したの巻まきととなり

小路中こうろちゆう納言なつごん藤房ふじふさの遺器いせき柄鏡へがたがたの圖ずをゆりて作者さくしやの鏡かたありて  
要まてあるある○下野国しもねのくに都賀郡つがぐん西見野村さいみのむら長光寺ちやうくわうじの境内けいんふ山やまあり里人さとびと

長光山ちやうくわうさんといふ山やまのふりてふ澤さわあり菊きくが沢さわといふ明和四年めいわしやうねん丁てい亥げ正月しやうげつ廿八日にじはちやうにち

長光山ちやうくわうさんの裾すそ霖雨りんうの爲ために崩くずれまかの菊きくが沢さわより堀ほりあり  
内うちふ觀世くわんぜ者を安やす置ます・柄鏡へがたがた一面いちめん・古銭こせん二十六品にじゅうろくにん數かず九百七十六文きゅうひゃくしちじゅうろくぶん

藤房ふじふさ卿きやうあり世成よなり通とほるはひく此こゝ地ちに隠かくれありせし事ことは日ひ後ご州しゅうのりて  
草子くさこふも人ひとたり・抑おさ此こゝ郷きやうの後ご醍醐たいご天皇てんかうふははく博学はくがくの賢相けんさうありゆゑ

天皇てんかうの御失德おんしつとくををを諫いさむひひと不容ふりやうゆる道世みちよありて終はつる西さいと

ありて終はつる西さいと  
太平記たいへいぎ・三楠実録さんくわんじつろくもも人ひとたりとてかか長光寺ちやうくわうじふちる玉田たまでん

村むらの境さかいは不二ふじ菴あん前まへといふあり  
藤房ふじふさ卿きやう此こゝ地ちに隠かくれありし事ことは日ひ後ご州しゅうのりて

行者ぎやうじやうとあるふ符ふ合あはれは藤房ふじふさ卿きやう此こゝ地ちに隠かくれありし事ことは日ひ後ご州しゅうのりて  
本文ほんぶんと摘要たいういを

○百樹案は日光驛程見聞雜記多記標蔭先生作校本 鹿沼馭の条は件の藤房の

柄鏡の裏ありて推移録の説みあるに其の細註は「予が十四五歳乃て後

下總国亀有とのみありて是又瓶を振りけりし内は銅塔ありて観音の像

一体經文古鏡古鏡あり塔は高さ七八寸もありて経いごとくこゝろあり

る儀はる極く沙利塔の内は納りあけり古鏡も金にて銘は「整衣冠謹

瞻視」と陽文は鑄付たり藤房卿の物なりと先考の許し持来りて示す

者ありし外は藤房のといへる慥なる証拠ありし事ありて事ありあり

ぬ時ありければ心をこめて見せしむ唯鏡の銘のみは實居あり大抵下野

中へ極ありし附と同一はよありて誠は藤房土中へ埋りたる靈物人

間み現る事神佛の加護中ありし事あり藤房卿後小

京都妙心寺の二世授翁宗弼禪師と号すの全文とあり標蔭先生の考へ

ましりも菊が沢より出現の柄鏡と同種の物なり又集古千種の都は柄

鏡の圖ありて大坂商家吉田道可所藏とある其圖と柄原推移録の

なる圖と同書より引る日蔭艸ふものせる圖とあるを考へる小大さも銘も

たがみ事なるは藤房卿父君の菩提の爲に件の鏡を幾枚も鑄り

考へ下ふりしべし所の靈場は瘞むひ物のむを五百年可下ふりしべし

土中みまし物今世より鏡三枚あり標蔭先生の考へ何地よりは免

むひもまらるるを然るのみは一つの話あり○天保元年七月百樹季子

京水と後て豆州熱海の温泉に浴して廿日あり旅寢の徒然は熱海

温泉圖彙とのみ物を江戸より作りし古跡をたぐひて附

同所の温泉寺妙心寺より住職は縁起と叩くは山を謂ふや此寺は

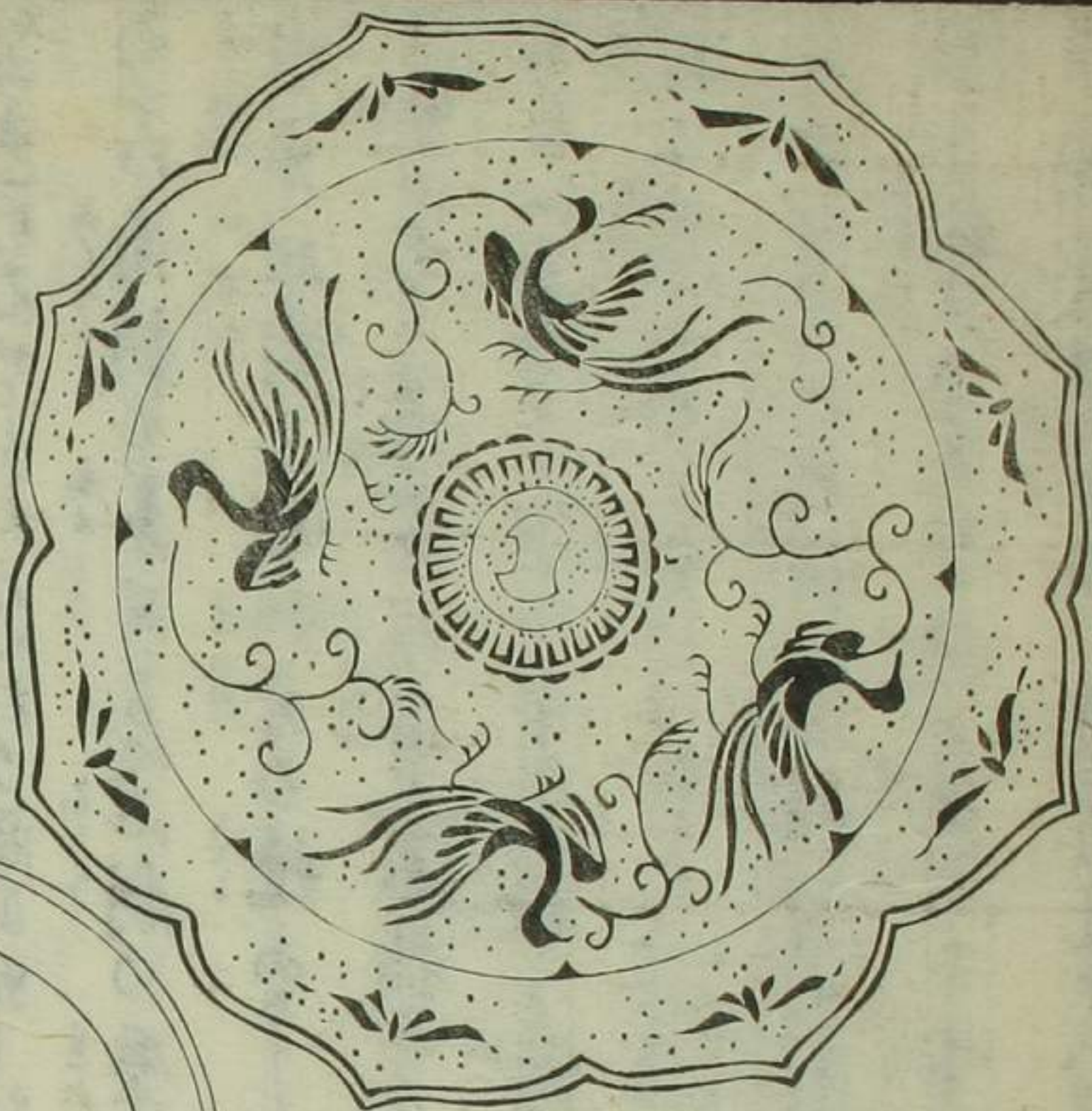
頼朝卿の建立ある中奥の祖は南朝の賢臣万里小路藤房に法名授翁

とて此寺の住職よりしふより本山妙心寺の二世は登りありと結りしは禪

師の遺物などありて辨せんとしひればとせざる也・禪師自画自讚乃

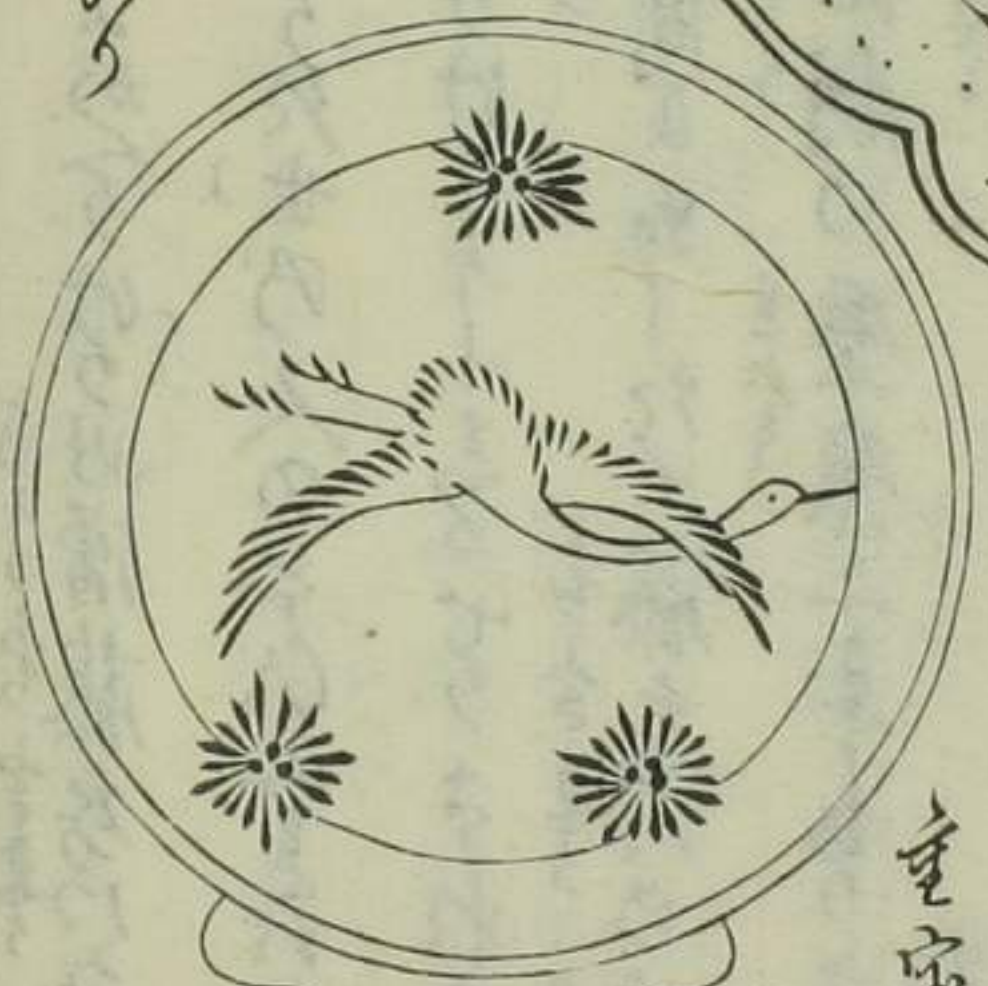
肖像・袈裟けさ・金・數珠ずしゆ唐物のたうぶつをどきする車あり庭中にわちゆうに禪師ぜんじ自植じぢくの松しょうを  
在ける古木こぼくの高浪あり一付拈ねんたりとてのちも同トたある若木わかしを植うゑをえし  
古木こぼくはたくえんありとまじりてい  
さくをさく香合かうがうを作らせ今いま秘蔵ひざうす  
品しんを埋うめありしもあるべしむ熱海ねつかいに藤房とうぼう卿けいの古跡ありといはれひより  
さうりう好事こうじのありきぬ○せむく藤房とうぼうの遁世とんせいに南朝なんてう建武元年けんぶげんねん  
北朝ほくてう元年げんねん時ときふ歳さい三十九あり太平記卷十三藤房とうぼうに遁世とんせい之事じといふ条じょうは遁  
世とんせいの哥うたとて「遁とんするふとてさ世よの人ひととて風かぜや庵いほの松しょうとて人ひと」件けん  
又またして旧跡きうせきの事ことの成なりありひいひせを遁世とんせいのち西朝せいてうの乱らんを避まひむひて東  
國とうこくは飛錫ひせきしむい跡あと成なりありひいひし中ちゆうとてある  
刑部けいぶに義助ぎすけ朝臣てうしん越前國えぜんこく會樂山かいがくさんに城廓じやうかくを構かまへけるよ山の案内あんないとあるん  
為な山さんふりつひ入りしよ松しょうの茶ちやもて昔むかし月つきる庵いほありまうこれ木きの茶ちやを集あつめ  
ひらとありさうある石いしのよふ法華經ほふがきやうをかけるのみりよはゆもさしあを

ありて中ちゆうをさうへたる佛ぶつありよかうける此こゝ僧そう藤房とうぼうにまうけるふふびなるれは  
かの石いしありありもまうた世よの人ひとのこひるまはやく雲くもよあどりて  
てん」とありてゆくへまはづけるよあるせうされし山さん國こくももさか  
からまわらせしとえたり國こくは出いでたる藤房とうぼうの鏡かがみの面おもては興國きやうこく四年しねんと  
あり南朝なんてうの年号ねんごうよん山朝さんてうの歴應れいおう二年にねんありけま今いまより弘化 五百  
余年よねん以前いぜんもも柄付へらつの鏡かがみあり一紙いしあるべし蓋けりさしる日記にちじあり柄付へらつ  
は鑄いさせ長谷ながせの観音くわんおんへ奉納ほうなつするがみさある藤房とうぼうの父ちち君きみのよ  
ありしむひるがみをりて換かへし鑄いさせ世よの眞福まふくの若わかし小観音せうくわんおんの像ざうと  
俱ともに死しへ埋うめありひさあり  
まふむりの風儀ふうぎあり續拾遺和哥集寫本しやくほん「公守朝臣こうしうてうしん母身ぼん海うみりく  
のち朝あさ夕ゆふをまける鏡かがみは枕まくら字あざを書かき佐養さやうしけりける導所しよはまうたま  
乃なわたり後徳ごとく大守たいしゆ左さ□かのりこまうつさける法印ほふいん澄憲じやうけん哥か・身み一人ひとりの影かげも



右八集古十種古銅部中山城  
國大原古知谷阿弥陀寺藏  
古銅の圖三十面之一

本書より大さ圖の如しとあり



和物柄鏡大さ圖の如し

山東庵所藏

右を四五百年の物と云  
・松尾集より伊勢が鏡の  
て鏡の形を伝へてといひ  
あはれる物なりとありけり

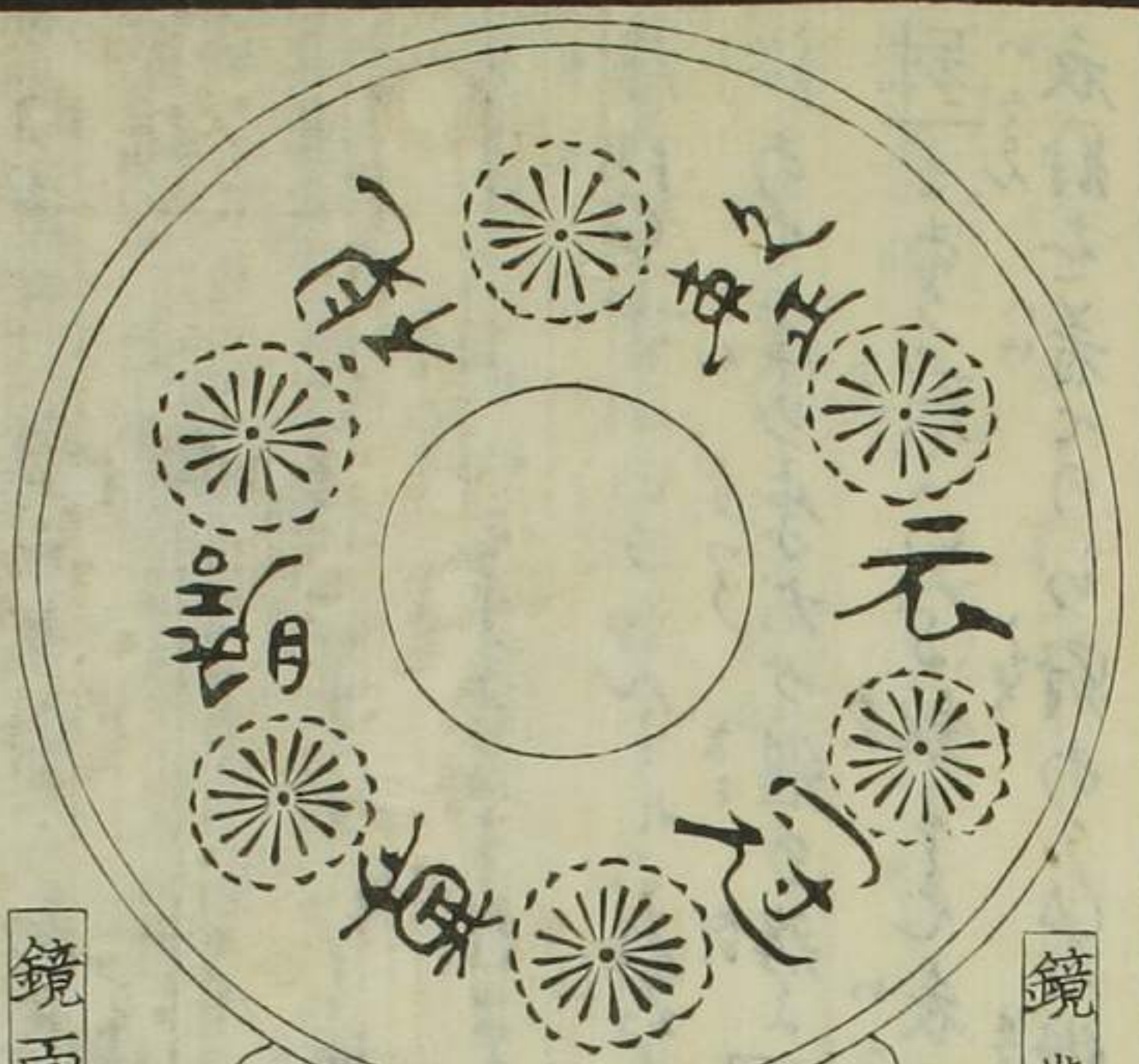


山東庵所藏

唐物硝子鏡

・たて 二寸七分  
・よこ 一寸七分  
金貨模  
細二枚のみ硝子  
絵やう形あげ  
國の如く格はせ  
わがまが内り

ぶいりわがみあり 按て今市申とて  
いさゝかぶいりわがみとて唐物を模  
作りしとめたるなり是れ五十年前  
以来の妙製とて今に下輩万家の  
重宝なり



鏡背

鏡面

右の押系推推録巻下よりとれたる圖あり  
此鏡の後醍醐天皇の御位は五ひし藤原の  
の遺器也其事実の本支子詳あり寸法  
後三寸五分・柄の長二寸八分・柄の幅五分五分  
下より五分あり此鏡を極くする長光寺託板も同く

是等の外一覽ある銘家の所藏和漢  
の古鏡を臨宮する國中万鏡柄柄あり  
ひわのまを採する万治高尾がわらわ  
せん鏡のどきとされどこれ余地ありと  
す

興國四年辛巳三月吉日

寶祚長久兼藤三位資通郷公

具福

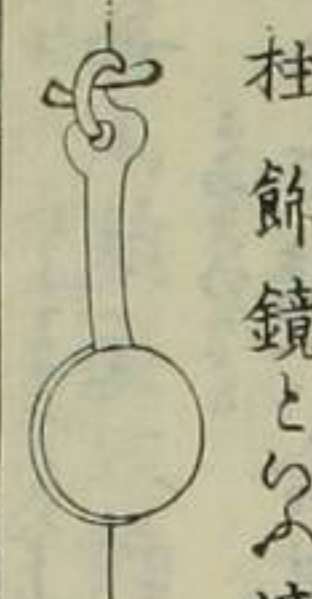
當塗王經一字三禮一品一錢千部

藤従一位宜房郷公福壽

不二行者授翁敬白



さいまきまを鏡むらさき車を今やまらるん」とあり今もあだ人の鏡成  
淡島の神へおさむるゆあるの古風の鏡りさるなり○かの郷の鏡の事成  
條鏡ハくぐく〜けまど又ハ國よ〜る鏡路「整衣冠尊瞻視」と  
あつら朱晦庵敬齊箴の語ある〜ハ此鏡ハ唐物と南都東大寺  
・妙法院・御室めとある〜  
日蔭艸みいり  
此書ハ山城の北岩倉大雲寺  
中ノ二坊の側ハ藤房ハ通世の  
髮塔ありその周縁より二坊住〜たる妙宏ハ僧カ菊ガ扱ハりゆ〜る鏡の  
終末者房ハ傳ハ緒書成引〜つまびやく〜船ト國ハものせ〜全一冊ト〜文化十二年  
ハ藏板〜右の鏡銘ま〜引〜棟蔭先生の鏡ハ尊の字成鏡の字とせ  
ら〜ハ蘭記の失ある〜○さて〜日蔭州成〜るゆ名右の鏡銘  
唐國の書よあり〜ん〜これハ素〜中ハ淵函類鑑 卷百八二 似たる  
銘あり漢の李尤ガ鑑の路「鑄銅為鑑整飾容顔修爾法服正爾衣  
冠」とあり前よ〜銘も〜衣冠を整〜り由此〜〜ハ柄鏡ハ  
衣冠を着〜のら冠ありハ襟さ〜照〜視〜ふた〜りた〜ハ柄



付は作りたる柄あり〜東山殿御飾記 群昏類從卷三百 大永五年の東山  
殿書院の飾の条ハ圖あり成〜ハ柄鏡  
柱飾鏡とハ傍註あり  
此圖ありハ柄鏡ハ衣冠を正〜物  
あ〜り〜且又和漢とも古き  
柄鏡あり〜ハ座右ハ

掛あり〜右ハ飾とあり唐鏡の〜あり〜  
○今〜鏡ハ〜柄あり〜時代を考〜ふ〜藏  
寛永の間の画ハ浴後の美少年湯女と〜ハ髮をゆ〜せ〜  
鏡を採り〜顔を視〜さ〜の圖あり又正徳二年の和漢三才圖會の鏡  
のハの圖ハ圓鏡と柄あり〜み〜二ツあり〜画けり又元文三年  
西川祐信ガ筆の繪本貞操草ハ島田ふゆ〜ハ娘圓鏡と柄鏡あり  
あ〜せ〜み〜圖あり〜これを参考〜る〜今〜の〜鏡と〜ハ柄あり〜

ありしに僅ふ百年来の事ありて古に柄鏡の如きものありしに

これと髣髴鏡といひ圓鏡を鏡鏡といふ

「著き附持のものとやびんかみ」附々伽羅乃の油もかくし女房

「著き附持のものとやびんかみ」附々伽羅乃の油もかくし女房

とも鏡の如き一由名合せ鏡なる事ありしに西土の太古より鏡と云ふ

ゆひく其状の名さ人あまもあわれは合せかみもあつらん

年板本朝 卷三小蓮といふ美人の傳は「小蓮性のき粧飾を愛自雲髣を

梳毎小就面双鏡を以て細照稍一絲有乱髪は必侍婢を呼て分理」とあり

西土の柄鏡の合せかみも便利ゆゑあり

四 ハツ花形の鏡・鏡の異名

鏡ハ菱の花を視て作りとドめ物といふ事西土の書ハ教見を即鏡乃

異名ハ菱花といふ古菱・紫班・紫珍・鸞頭・百練・壽光・散文・白崎これ

みる鏡の異名あり菱花ハ即ハツ花形なり

社の什物の鏡ハ菱花の真鏡あり裏ハ文字ありとこれハ和鏡なり

奈良七代の頃といふことあり

是千余年以上の古鏡ありその文字も圓也かたのうせるハ遺感事あり

けり西土の鏡譜といふ書ハハツ花形のも大小ありしとありんハ若年の

五 かられかみ〇鏡餅

一条院の御世の間ある物語各ともよからのかみといふ詞あり

「小清少納言枕の草子」卷二

とあり此比及ハ唐國の便と易しゆゑ萬の調度大なる唐物を用ひ

ゆゑ唐の鏡もせよわらじあるん今も神佛の什物と云ふ其の如し

とら鏡なるは唐物ありされど千年以前の和鏡の唐物はゆた  
れやま具眼を鑑定するにふた鏡の圖をそとるべし

○周之今又鏡録との人物と古くよりありし物あり 濱松中納言物語卷四

「餅鏡」とあり 源氏物語の巻の初月「あかきふむきおつたふくあ乃

のちひかみ」とあり 又源仲正家集 仲正頼政の父あり 元日恋「千代中を由彩成あり

べく遠んといふ鏡ののちひかみ」用ひ解ふのひななり「彩成あり

とあり」とありと今よりあそむるのどくかきも一ありふもあつらんのちひか

餅の事形圓なるは唐鏡といひしを今にのみちとの正月かみなり

をかざりといふ事八百年のひりも件のごとく又正月廿日かみなり

と女中の従への初顔といふの心を東山殿比の管中女中のまを海と

ありぬたあらのとたのちののいさるのありしふ今にちんりちはたとれと

ゆき物事自由なるは九尺貳間をわが家とまる夫婦ごじののまらるる

へ成かざりて初書成りてはあつけれ 浄代の國澤は浴するゆあまの此ッも

國恩よりさへくは鏡餅のの猶又引き書あねを食物沿革考よりあへ

六 鵲鏡・鶴の鏡

古鏡の阴は何そもあねなる鳥のから成清対するお和のゆも浪のゆをあり

此鳥の鶴あり 神異經 此書東方朔が作とる古鏡を打て清人姚際垣が

を和鮮を昔漢は夫婦あり支他國は行くと別々附妻のゆありしなり

ける鏡を破て二片とあり一片成懐あり一片と妻のゆとて再會べたの伝と

を其妻人よ通下ける夫がのこたる信の鏡の一片化して鶴とあり遠ふ飛

て史の前ふり再片鏡とあり夫乃知之とれり後人因て鏡を清るは鶴と

鏡の脊は為とあり流傳度き故事とえへく 潤鑑類函 卷の三百八十 佩

文韻府 卷の八十二 敬韻の部 格致鏡原 卷の五十二香 器器物の部 書中もとる又此故事よりみ

古おも多し一花の一ツ散木奇哥集俊頼「まきかみうらうげさひまを

かひだふ心からその後成るるか」とあり集古十種の古部古鏡の圖百十

八枚あり其の中み鶴のかみ四十一面ありてりりとも和漢の古鏡と云ふ

又古鏡一鶴の模様つゆも本拠あり拾遺集賀の部「かみいせせとるり

けるうらふつるのかさ成いつけさせとるりて「ちやせともふうのうんうらふ

まむたづれ入とど思ふべかりけ」とあり又百年ふりころこのかみ南天燭

を待付たるもの多し是を橋菴漫筆小易の卦象とあてて糸トたるる

鑿説二似さるるうのむぐ一たるるあはるる南天を雜轉と名給て雜

轉る祝事多ゆ多し姫入の轉もあてんの葉成いりあり此物殘食

物のかひ一まふ南天燭ハ毒成消一氣力を盡と本草は見入るるゆ

七 七 七 の鏡磨

むうハかみをさふ酢將水草の汁成用也夫木抄淺草の家木抄「かみ

のそふハかひるかみ草露ハ月ハ影みたハ「又鶴岡職人盡哥合み

ふ一影ゆたハさみる成たハとハくまりハかきむハありるハげハは

とあり又石掃子の酢も磨とハとハ七拾一番職人哥合ハ月ハのハ「あ

かみやハけハらハれハままれハ影さるハやハ鏡ととハありるハ月ハのハありてハ此ハおハはハる

かみもハ人ハのハそハふハ石掃成ハ多ハけハり後奈良院宸記天文四年ハ今ハ弘化四年ハ二月十四日

晴復中畧彼岸櫻進上今日鏡磨恭」とあり天文四年ハ今弘化四年二月十四日と

あハはハかハさハみハ材ハもハさハるハもハさハれハ付ハありハ此ハかハみハとハあハりハやハ磨ハけんハ不ハ審

さてハ右ハれハおハやハもハとハ微とまハれハバハ四ハ五ハ百ハ年ハ以ハ前ハハハ酢ハ將ハ草ハ石ハ掃ハ子ハありハとハ待ハて

鏡を磨つてハんハかくハてハいとハ不ハ自由ハありハ事ハ多ハとハありハるハせハどハよハくハあハりハバハ四ハ五ハ百

年ハ以ハ前ハハハ女ハのハ鏡ハ成ハ所ハ持ハ多ハりハやハりハあハりハのハみハもハあハりハとハあハりハのハ女ハのハみ

とハあハりハのハあハりハるハ如ハ「此事下ふハさハらハうハみハ鏡ハのハ女ハもハさハるハらハしハゆハ多ハとハさハみ

ざららるる事まみりさきりかみさきの事家兄の骨董集にもありき

人倫訓蒙圖彙 元録二 年板 かみさきの条に「鏡磨みまきかひれきわすとのりよ水銀と

合せし砥の粉をまじり梅酢をそそぎ」とあり又「のちみよ竹」 寫本全五卷 正徳二年壬

派の霜月筆を石花菴の巻「母のまゝみ裁ぎをきまらじ」寛永承の頃ハカミ

ざく後の汁をそそぎみ裁のちの梅の酢を本中みぎくこまよせのう

らありし一ツありといふまじり「さありはらうくわりの昌平の岡澤みはれて女由

假粧をたみ鏡もせよ多くありしゆき鏡磨もゆらぐざららるる梅酢

よありさるるべし世れ中のかさるるも安居み鼓腹するゆきさうじり

世の中は鏡のまきまかき「証柳つきとよみくさるるべし」

八 松山鏡

雜譬喻經の釋迦の時 卷の下よえん「昔仏の長者の子新に婦をむくへよあり

時支婦は語曰卿厨中み入りて蒲萄酒を取来れ共飲んと婦性て甕を

開き自身の影のうらむと見て謂更に女人ありて此甕中みかきかくとわりのひ

還りて其夫よひみゆり汝自婦人ありてかめの中み藏著るがう我を迎ふと大

み悲乃れ夫いぶうく厨み入りかめみひきま己が影を見て逆てその婦を

恚て絹汝とせかめの中み男を藏かくるれと支婦相忿恚自呼為實のひ

あらしひ誼諱して不止時よ梵士来り毗丘尼も来り此支せまかめみひ

持のかげらるる成て伴りてけんさるるに去る時よ道人来り甕を視て曰

汝汝等が為よ甕中人を當出とて大石取りてかめ破打壊なれば酒みかれ

尽て物有とらう夫婦もみりて身の影ありしと知定壊慚愧なり」とありまの

事を一ツの話として 宝物集 此書は清盛公の巻に後寛和とよみ配流せられ 平判官康頼治美三年春帰洛の後作りし物也 卷の

四ふ書るるを本板として作りたる 鏡破の繪巻 學友梅 園所藏 との人物あり 東山殿 項の物 其の

中よ都の四糸ある見せ棚のまみさるる百姓が鏡を買ふ所の紙巻よ四條通

へゆたなる小商人品々のうらむ物なごうあたるうらむは鏡ハ世のころ態勝より

さうする都又なるつらさをわき痛むてあるべからざりてこそまがむとていふつ

りて凡き物あり」下畧との此繪巻を本拠とすけん 外百番松山鏡の謡ふうたひの東山殿

此松の山家こや西の我住里と云ひあづる光仏世界のところ移めて男のあれども

あがりをもまかせ むつら百姓も常ふ女をたをそとね あつらひもはあむむらうとあむむらひも

あまねう鏡さぞや物もまらむむか」とあり又 土産の鏡とて能狂言 続狂言ふも

ありづまも田舎の鏡との人物をそめててそおのほが影のうらつまるて人ありと

あひひて愕然車をわりのうらつ移る物あり 越後の魚沼郡は松山の庄とのみ所

右はゆきもと徴とまれは今より三百年あまりのむつら田舎のさうあり都とて

も賤き女さる鏡持する稀ありけん案ふ此比及の女の貴賤やも垂髪

ゆき今れと髪よかちと併結ひあづるゆき女容易に髪ふかひゆきえぞ

けるゆきる二百年来鏡の稀ありし事件の如くあるふ今の都會の百物備

とらざるいさく鏡さるて近上陳列ても賣をされは市中の婢は鏡は對早苗

取りたる指みおしるのてとたて泥のそねる顔みぬつつけ麦飯くひする唇みぬ小を

さまたる昌平万歳の時せみ生れ鶯花の鏡澤を蒙るありがささ紙あはる

ぶらうを鶯花の地よ生まれ一人のいふもさうありりや

九 懷中鏡

今ある古鏡の小ありむつらの懷中鏡ありてあむむらうのむつらのよりある

女の今のとらへののまうでのさたあゆかむはる半古骨ふ散見はる懷よりみ

りちけん 和泉式部集 下「人れゆたうけるかみのとと紙かへーちとさかぢ

だむをさぬらさうけりまう鏡とこのかたりのいふかひをある」これの男のたれとす

れさるかみとらへを哥ありつされとあまが懷中鏡ありて男もふむらう

かみひてバ女さう也又 枕のちりし 季吟「まよげある人のよらの風のささかかね

さめはまがねさうねむきたるまうよかみうらちと」とまの大内の女房宿直の

時のさるまじく手近く鏡臺をどむべきやうな一枕ののふおたる懐中鏡あり  
ありけんう後の物よと入る中玉海六百余年前治養の頃の物写本 建久二年六月の条よ  
鼻紙の間小鏡をいきて持事とてうとまを徹とされば古き小鏡ハ懐中鏡  
あるべし西土にも懐中鏡あり清人紀時作 金四冊中箱本 卷三「新婦拜神懐中  
鏡忽隨地裂為三」とあり地小鏡て為二あるてかみの薄き事明一因と  
おのふは是硝子鏡也清朝も懐中なる硝子鏡の圖前ふ出せり

十 鏡を照して面鏡見せ

晋書殷仲文傳 小仲文誅せらるる条の文に「仲文時照鏡不見其面數日  
遇禍」とあり鏡を見ても面のうつらげしとありおのふまをいへる如く鏡ハ  
威ある物ゆゑ然る事もありけんうおのま若うしは母の語ある神鏡ハ一  
間摩をたかみをたのまき蓋はいさおたる小婢あやまうて踏蹴しとあると  
あゝおのふは是れ果く曇りてありしやあるけけるふふみこえし婢月のさるり

みくありしと語まき此かみ今猶家あり陰ふ南天を清けしる常並の  
物あると頗る灵ある小似しう且母の遺器あるは秘藏とさふかくかみら  
心まべき物ぞ

十一 鏡臺小守を掛る・椰の葉・鴛鴦の羽

雅亮装束抄 卷一 小鏡臺小守を掛る事見えり此書の作者雅亮朝臣ハ  
治養の間の人なり山槐記 さきバ今より六百余年のむう一鏡小守りてかく  
るもかみ女の護身物あるありあり鏡臺ハ椰の葉・を鳥の羽鳥の羽 非諧連山集  
あんてんの葉の事前よつ 正保元平板行 椰の枯葉小守るまが見分虫くふおのうとさとうへし 非諧  
毛吹草 寛永 志の葉茂椰ふのち人の鏡る宗房此宗房とらとを誤 非諧夏の日  
享保 羽まろく人ふ遠ぬ奉公甘椰の葉鏡の裏の忘州河東水調子 結句よ  
廿年 曇らぬ月の面影の椰の枯葉れ名をうり小鏡の裏ふおるらんあだいかみよ



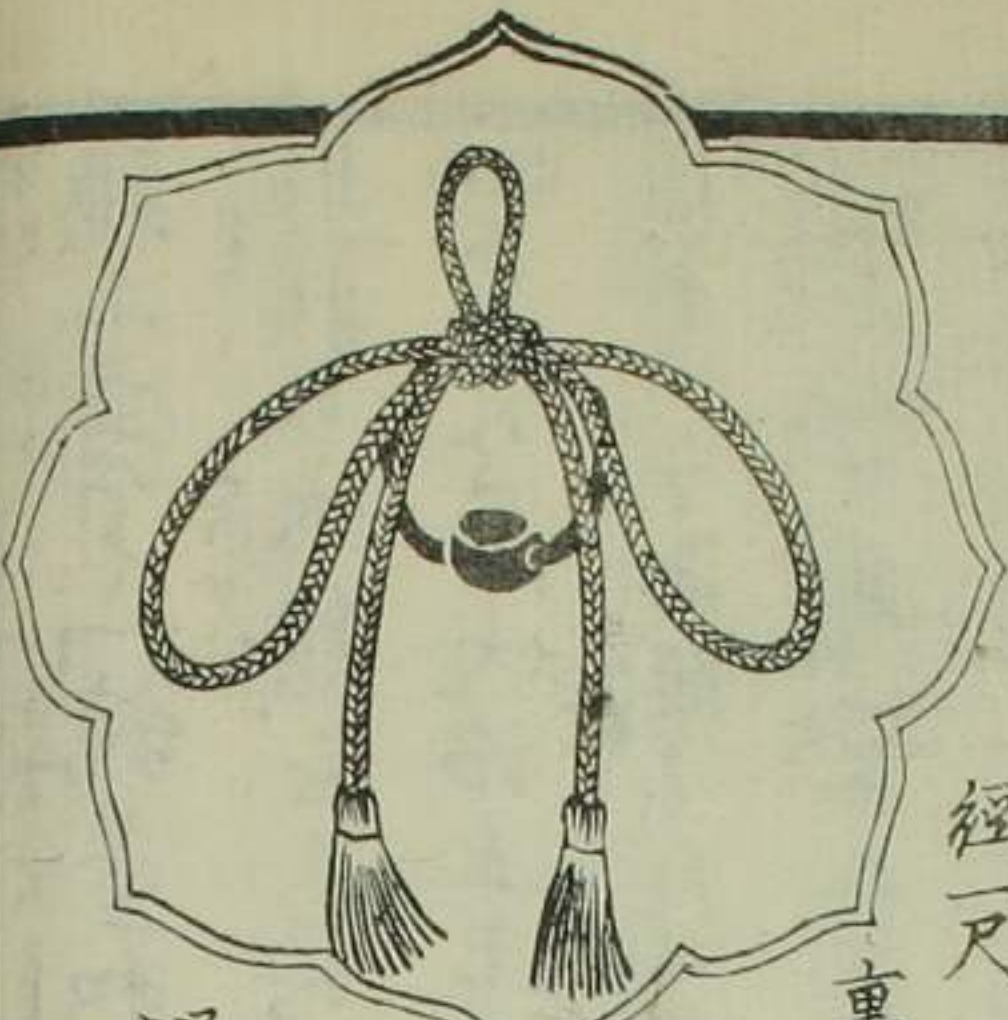


鏡臺之圖

熱く地  
ま貝入り  
藤絵

本書傍註の鏡

經一尺



裏鴛鴦  
唐艸

かまの  
緒長さ  
五寸五分  
三寸五分

類聚雜要卷四に此圖あり是ハ

今より七百十三年

大治五年二月廿一日

藤の聖子中宮より

右に立即の時の御調度の



羅納とは此の本書

かまの緒を二重に巻いたるハハハハ

竹宮のあやまりと云ハハハハ

此の形は藤の枕

松のかまの守りあやまり  
鏡にせりし概の事古書  
み所見多し形も筒守り

永禄年中の寫本

元服法式に此鏡臺の

圖あり

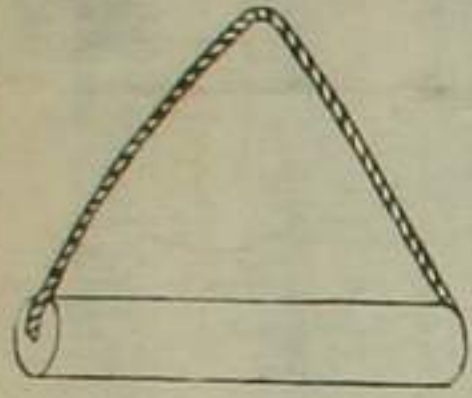


鏡面

古の  
かまの  
裏

依てありのふふまや  
たる大治年中の鏡臺  
と形ありたるが大治より  
四百余年の後に藤の  
かまの緒を二重に巻いたる  
臺の如くありと云ハハハ

此の右の同  
ころに略を



はかへん枕羅納のまこふ入る  
是も筒守りあやまり



○九冊の栄花物語にハハハハ  
の巻の圖中ハハハハハハ

○元禄元年板

女用訓蒙圖彙

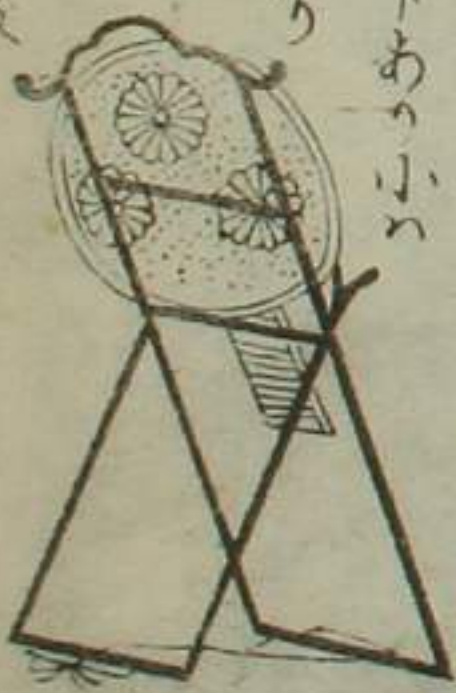
此圖あり

大の鏡臺下ありハハハハ

鏡架トあり

此形百五十

余年來  
今にハハハハ



箱ハ之百年の以前よりあり物あり又むろくそたむむ自在なるがみ  
たてハ宝永七年板 今より百二十八年 誰が身上八年前 小川崎氏の妻の句と云「かみ 髪より  
む所ハ月の鏡」とあり○西土の鏡蓋用の部 鏡の次ハ鏡臺  
とありて魏の時宮中よりありしものとりけり他の物中も見えなれど  
とありてむらむ

○西土の鏡の起原

事物紀原卷八 夫ハ中記を引て鏡ハ堯の臣尹壽作りとぞむといひ又黄帝  
内傳を引く黄帝既王母と王屋會して大鏡十二面を铸て月ハ酒  
ひてあるは用也則鏡ハ黄帝肇其堯の時とぞめて作りしありあつむ  
とりけりさむは鏡ハ和漢ともハ太古よりありけるゆゑ其故事もいと多かれ  
るるさけむをゆしぬ

十一 櫛の始原・擲櫛を忌縁・湯津津間櫛の考

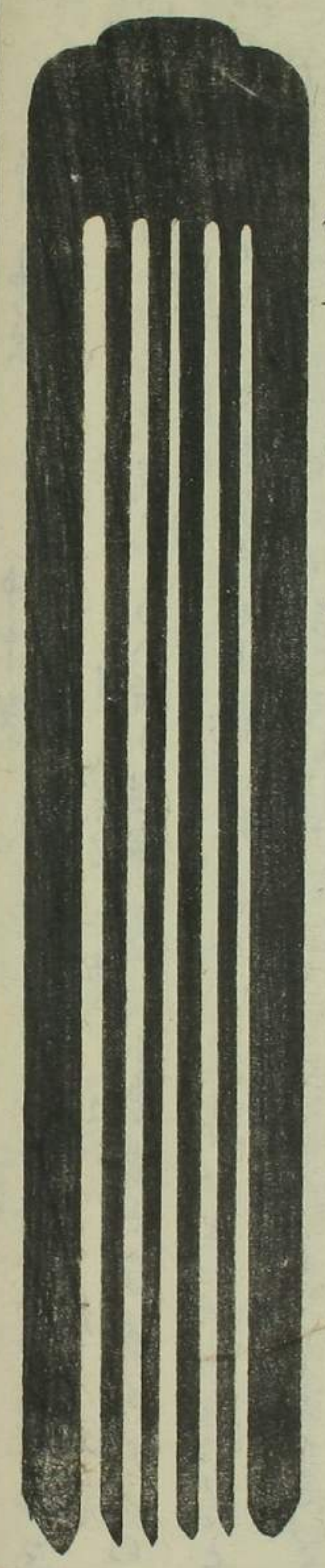
人ありて髪あり髪あり櫛もあへりされば櫛ハ鏡よりハさむあり物  
とぞむありて・神代ハ櫛の事の 日本紀 不見えり・伊邪那岐命男伊邪那  
美命神女と御合て女神の御腹ハ御子三十五人産みひて 按るハ多産ハ神通多  
人理をのりて推へる事  
遂ハ神避坐多りハ出雲国と伯伎国の埭比婆之山ハ葬ハ奉りし  
とぞありたの命御妻のりさみみ命を慕ひあひて黄泉み至りあひて御妻  
の屍を視あみハ圍うれば左りの御髪ハ刺せあひて湯津津間櫛の男  
柱ハ一箇取闕ハ一ツ火ハ燭ハ女神の屍を細ハ視あひさて還りあみ付  
泉津醜女眞土の鬼 命を返かけしハ命黒御鬘 あそひとあそひたる物あり  
男女髪のをうとぞ神代の風也  
投棄あひりハ醜女生蒲子 今り とありひて撫ハ食の間ハ逃行あひり  
猶又逃りハ其右の御髪ハ刺せあひハ湯津津間櫛を引闕ハあひり  
あへハ生筆ありとありひて拔食間ハ逃行あひりハ 古事記 神代 黄泉段ハ  
あひりハとありハ摘要ハとありて是ぞ櫛ハ人物の神典ハとぞる始あり

けるまゝ伊邪那岐命より猶前世より櫛あり物ある事明し○右の  
黄泉段にて命の刺せし櫛を投棄あり一史を日本紀自註して曰今世  
の人夜忌片火又夜忌擲櫛此其縁」とり斯註したる養老四年乃と  
ある今も擲櫛を忌事千百二十余年前者の風儀あり櫛の入りぬれぬ  
○さて伴の黄泉段に「湯津津間櫛」とあるを同書の八俣遠呂智乃  
条より湯津爪櫛とあり本居大人が古事記傳に爪櫛の爪櫛の齒  
のまげく間の堅くせまきる儀の古の櫛の爪の形ありとも妻櫛の  
意ありともいふ誤ありといひ又櫛の本串と同ト名あり黄泉段火を  
燭しありと思へ上代の櫛の齒や長うじふ串と同類ぞうといひ又湯津  
の清浄の義又木の名などのいふありとむとといひ又同条あり  
を射所の湯津桂の解あり湯津ハ五百間あり枝の繁をいふといれり  
以上此説み扱バ湯津津間爪櫛といひ何れ作りたる質ありとねど  
摘要

櫛のまげくせまきる今之の櫛より長き物ありといひ解あり櫛もく本居大人も  
博達のおのひと古事記傳よりめたる大家をいふ其説ありのまが浅学の  
齒口をのりて間然とせたるありねど竊み謂く件の如くいふは命の櫛の  
齒を火ふ燭しありといふのみありと豊玉姫鸕鷀草不合尊を産ありと  
御夫の冬出見尊櫛を火ふ燃しと視あり一事あり神代櫛の火ふ燃し  
ゆて本ある事論をまごせすゆ湯津桂といふ本もありとを神中抄に  
或人云やハ湯津桂の本ゆて作之はげの櫛の如くつまい妻の義」とあり  
本居大人此説を信ずる前記に新撰字經あり「柞ハ奈良の木又志比」とあり  
和名抄部「柞四  
声字苑云柞和名由志漢語抄云波々曾木の名堪作梳也」とあり湯と  
志といふ音近きゆゆ湯津の津を後年より由之といひけんし延喜式内藏寮  
千年の天子の御櫛の事と「年中所造御梳三百六十枚中器皆用由志木と  
あり此後さあすせその齒音ふくはうてゆすの本ともいへり梁塵愚案抄下  
卷



櫛長く大ききやうに、髪推てまうるれば、大槩ハ心みほのせぬまど灼然一たる  
 証ありやあむひもつらひけるふ一日、学友来りて物語のはひで櫛の髪をかきし  
 ふりのやうに前年西遊せし時、南都の達識穂井田忠友公羽の宅に  
 櫛寫といふ物を視し、中ふ一古寺の宝物とて神代の櫛を視て、摸寫するに、覽  
 まく心み忘むまうるやうに、まうるやうに、その終席上を、間記の圖を寫させ  
 たる、紙下みまを、此國代とれば、むらゝの櫛をかんざしともひい、いふまう髪とさ  
 まんた物ふあうま、周をむらゝの神代ふも、解梳ハ別ふ有けんか  
 長さ九寸余、幅二寸五分余、木を作りたる物、作りたる古朴なり  
 木の質、糸トグーとを



此國を視し、伊井諸尊、櫛の男柱をかたやうして、大み燭し、あひて伊井冊  
 尊の屍を照し、視あひ、も彦火、出見尊のうがやふき、あむものこと  
 の生れあふ所を視あひ、やうの同あり、櫛の大きき、実あをむらゝの  
 又黄泉段のまらふ、櫛を引くたう、あむを、生筆、ありとむらゝ  
 醜女、校食し、もあむ、櫛の形、ち見也  
 但し、あむ、神通、みそ、其物とあり、さ

古櫛の考

古事記に、扱りに、あむ、櫛の齒、み火を燭し、その屍を視あ、間  
 あり、此櫛、大きき、うん、櫛の櫛を刺あ、御頭も、御身長も、推て、志  
 らる、あむ、種、植あ、さる、草、う、初生、ハ、花も、果も、大、あ、う、う、う、  
 間の人、ハ、あ、う、長、大、あ、う、ん、ハ、天、地、自、然、の、理、あ、う、め、と、ね、ゆ、い、ハ、果、し、  
 常陸風土記、此書、ハ、今、より、千、百、四、十、年、前、和、同、年、中、諸、國、  
 大櫛と名づく上古の人あり、躰極長大、丘壘み身居て、蜃を操食、畧其  
 大人の踐跡、長さ三十余歩、廣廿四歩、  
 一丈、古事記、御歳十六の時、叔母御の小袖を備着し、乙女の扮して、他所へ

汗あまのまあり 同書小見也此更おそる 此をむごの身れけりも推てあそる

此尊の第二の白王子足仲彦命 仲彦 天皇 御身のたけ十丈又大常彦淤刺

呂和氣命後たけ一丈二尺脛四尺一寸 紀 無仁 又及正天皇後たけ九尺二寸脛齒

の長さ一寸二分 紀 皇代 直らみおひ比ぶれば伊井諾尊も火出見尊もはたけ

一丈の余もありけんし さきび後髪み刺せまみ櫛のたけしをむおひひやらるる

中み独り少彦名命ハ鷲鶴の羽を衣とあり 大己貴命掌中み

あはれ むらあま 一ハ當時の人妖あそる 日本 書紀 上代みみ樹中も百丈七十丈

ある大樹あり 事 國史小見也 不引 ○天竺の劫初の米ハ大さ四寸あり

起世經 小見也 釋迦如来身のたけ一丈六尺神農ハ八尺七寸黄帝ハ

九尺み逾孔子ハ九尺六寸 周尺を今尺みし 七尺六寸八分 とまりの書見を以て和漢の上古の

人のたけしをあらそる 又上古れ人のたきか 証拠の残り ハ 新著聞集

余深さ二尺九寸の石櫃を掘出せり 閑きとれば骸骨一具あり頭の廻り

三尺七寸額より腮まで一尺七寸齒長一寸五分左りの奥齒より右の

奥齒まで一尺四寸外み劔二口あり 一口ハ長さ五尺五寸中三寸一口ハ六尺

八寸中二寸五分鋒の必一本長三尺中七寸矢根廿五本各長一尺二寸

元祿十五年壬午四月廿四日の事あり 鳥居 此の人物 写本 全共卷

此更をあらそり 寸法時日さる此骨み肉有へいそる大人あそる又新著

聞集 同 延宝三年鎌倉深沢洪水みく崩きこころ 三尺をりの頭骨あり

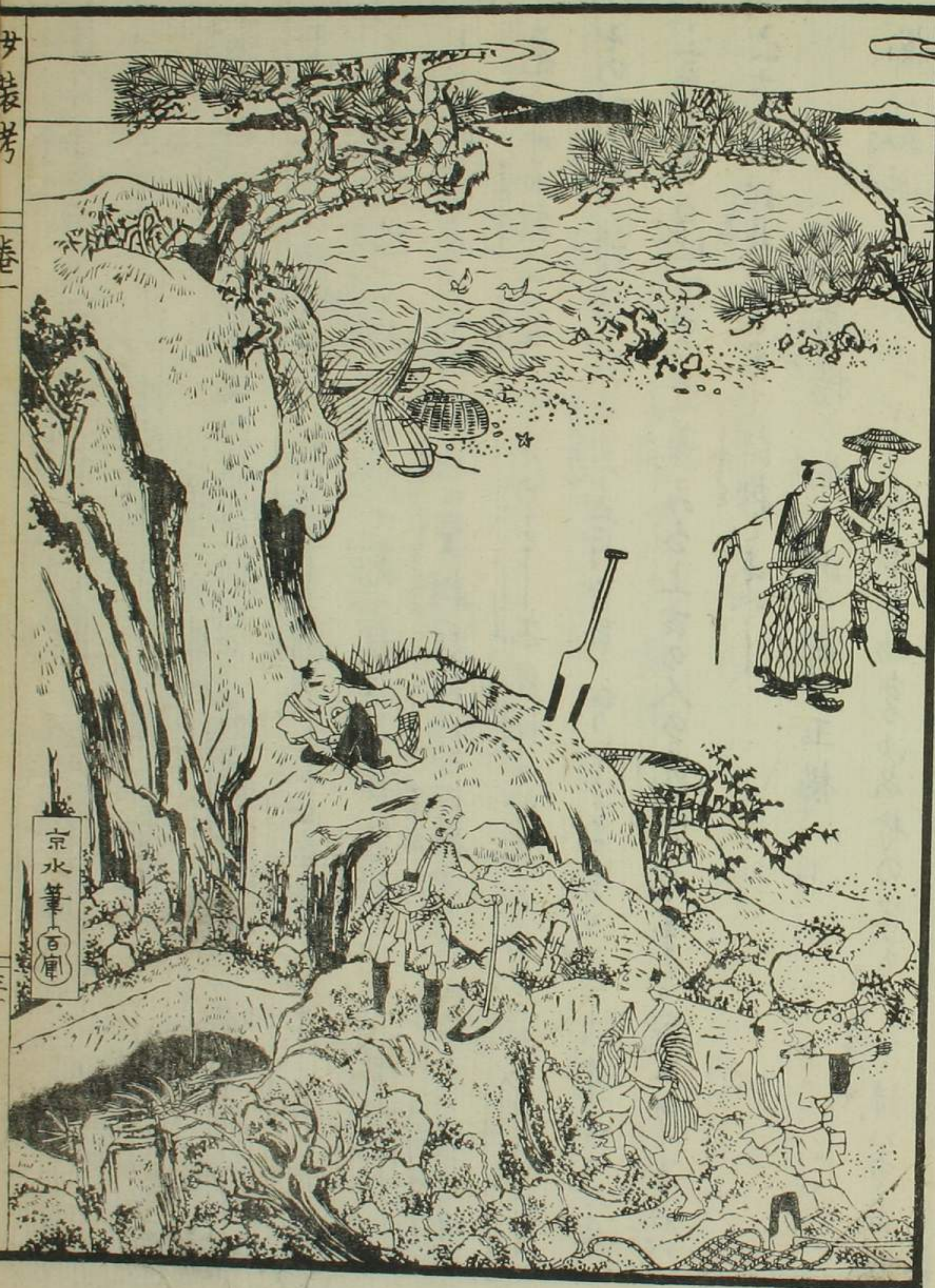
とれり 小齒の長さ一寸八分若宮小路の渡辺氏その齒一枚おきこころ

ぐろりの本の所へ埋 とど 又 諸國風土記 写本寛政十二 年無為菴作 奥州義経腰掛

松の条み 半田村百姓善右工門が地み古塚あり を享保二三年の頃

ゆきあり 極崩 けるみ人の頭骨あり さ 三尺四寸上齒四十五枚

下齒二十六枚齒の長さ一寸四分其齒一枚おの家み さ ち



岩本寛矩その家小一宿して見ると結わく」又見聞奇談

岩本十五卷 元文二年の

作自序小九華 卷之三 傾日官車

山人とあり 飛驒よりわたり一人の物倍ふ飛驒

國大原郡の内山霖雨崩れ大石道人おちたる其跡は石棺あり山賤

ども打よつて開きこれ骨あり頭の大さ四斗樽をどりの骨々も大

まぐ太刀一振半朽飾も碎て見こみかぐ目くらまあり一六棄置くべし

と山賤がえりて村長関て翌朝村長おの山賤ごの成は是て其跡より

見うふる石棺ふ蓋にて元のごとく不思議ふわひそのき埋めさせしと

その村長が語りきと去年五月の事ありととぞ吾が関一の真保十七年

二月十音あり」とあり是等みる上古の人の死骨ある事うかひありされば

上古の人比長大あり一証拠とまへ

十五 黄楊の櫛・沈の櫛・玉櫛

櫛ハ和漢とも木めで作りそめりる物あるゆゑ名々の字も从木・梳ハわくじ

批ハとびたぐり・篋ハとびたぐりあり此字のみ从竹よりハ篋ハ竹よて作るゆゑ也

唐より始る物也今も是を唐櫛といふ櫛ハ字ハ櫛の總名ありと

字彙 小見えり○髪もく上古ハ柞の木より櫛を作りたるハ前みりる

がごとく今ハ貴賤その小髪ゆへあり黄楊の櫛を用ふ賤の女の刺櫛也

まろ今日本國中の風あり此は古比今六千年まへより賤の女のさへりる

物あり 万葉集 三 志加の海人わめりる櫛やたけいそまみくげのをを

とるも見あふ 此歌を取直して 伊勢物語

八十 七段 「あけ屋のあぶの櫛やきいとまみくげのをを」もさざまふあり

これハ 又 万葉集 「君あくバあぞ身かぎらんくげあるつげのをを」もさざ

と地のりる 此他 基俊集 夫木抄 家のあみもつげれをを」とよみする

あり又建長八年 今より六百 百首哥合 後九条 内臣 「あみ事れつげのさげき

もやはあぶらるあみせくくべし」賤の女らダはけのををむりよを



さうたる事かくの如く又大内此宮女も本様けしるる清少納言が  
枕のまじり季吟本の一法をいへ七日いふ月雪間のつらなををやうみほみのぞ

中車畧くわらふまじりいみほるる見ふゆゆ御門中のみどりのとまきみひたのり入と

か頭ららふもゆとささるるよ轉まらび合あひてまくもあち用意よういせねををれ

まどい英てりらふもまき真あまくまある宮女三四人も来たらん物見車を

清門まのまへまのりまけまがまうまとま引まゆましたるものふ女中さちい願いをまち

ありまけまたるま櫛まのまちまるまもま心まづまるまをままままま折まきまるまなどまいまし

けまどま車ま此ま内まあまれまばま笑まひま須ま保まちまもま又ま一ま具まありまとまありまさまうまがまもまち

なまをまむまんまどまとまいま入ま交まるまはまくま宮女も本様さうたるをあるべし又定家まの

とま同ま時まありま明月記ま信實朝臣が作の今物語五節まのま冬まのま上ま舞ま姫まのま木

櫛ま紙ま火まのまふまたまくまさんま燃またる事さうまさまてま貴ま重まのま沈ま香まのま櫛

もまあまるまりま榮花まのま表まふまあまらまかま孫まのま箱まれまあまふまかまみまをまいまままぢまんまあまるま

白まかま孫まのまかまうまがまいまをまいまままとまありま沈まのま櫛まといまのま事ま

何まもまをまもまはまそのま物まをま美ま称ま辞まありま万葉ま四ま乙ま女子まがま玉まうまげまあるま玉ま櫛まの

いまうま今まもま妹まふまあまたまざまれまがま又ま玉まのま飾まをまをま乃ま玉まもまりま夫ま木ま抄ま

櫛まのま心まをまばまあまあまあまらまうま白ま露まのま玉まれま小ま櫛ま紙まけまりまてまりまままんま下まみまあませまるま

政ま子ま清ま前まのま櫛まのま形ま状ま此まあまふまうまくま似まらまうま○今まのま度まのまさまうまれまるま

の事次み出を

歴世女装考卷一終



